

スカンデルベグ物語 伝説とヴァリエーション

三谷 恵子

はじめに

バイロン卿, 物語詩『チャイルド・ハロルドの巡礼』第2巻38に謳う—
アレキサンダー起りし所, アルバニヤ
青年の題目, 賢者の燈臺,
はた同名の彼も出でぬ, 彼に屢々敗られし
敵は勇猛の彼の威の前にひるみぬ,
アルバニヤ...¹

英国から遠く離れたアルバニアの風土は、異邦周遊の旅にあったバイロン卿の関心を強くひいたらしく、卿はアルバニア語を学ぶことさえ試みたといわれる。そしてこの地の題材として謳われたのが、スカンデルベグとして知られる中世アルバニアの武将だった。破竹の勢いで西方へと拡大するオスマン軍を相手にゲリラ戦いを戦い抜き、敗戦はただの二度、負傷したのは落馬して肩を打ったときのみ。その不死身の体は彼が持つ剣とともに、あらゆる兵士たちの畏怖と憧憬の的だった、と伝説は語る。

本稿は、今はアルバニアのナショナル・ヒーローとなっているスカンデルベグの物語が、さまざまなヴァリエーションとなってヨーロッパを一周した顛末を紹介し、世界文学者の沼野充義教授に捧げる小論としたい。

1. スカンデルベグ—史実と伝説

古代マケドニアのアレクサンドロス大王に始まり、名だたる歴史上の人物はほとんどの場合、現実の生涯とはかなり異なった伝説によって後年に知られている。スカンデルベグもその例にもれない。

西に進出を続けるオスマン帝国の前に立ちはだかり、キリスト教世界を守った英雄、と16世紀の西欧で賞賛されたスカンデルベグことジョルジ・カストリオティは、アルバニア北部を領地とするカストリオティ家の三男に生まれた。²カストリオティ家の由来はぼんやりした霧に包まれているが、もともとアルバニア内陸部の山岳地帯にいた小土族がアドリア海沿岸に進出し、一定の勢力をもつに至ったものと見られる。スカンデルベグの父の時代には、すでにイタリア諸国とくにヴェネツィア共和国や教皇庁となんらかの結びつきをもっていたらしい。

一般に知られるところでは、スカンデルベグの生年は1405年、没年は1468年である。

この頃の南東欧とはいえば、オスマン・トルコがバルカン半島を北上するいっぽうで、すでに「瀕死の病人」であったビザンツ帝国はこれに対しなすすべもなく、ブルガリア、セルビア、そしてボスニアといったバルカンのスラヴ人たちはオスマン皇帝の支配下へと組み込まれる状況にあった。1453年のコンスタンティノーブル陥落という、キリスト教世界の図版を変える象徴的な出来事もこの時代に起きている。

と、このように15世紀前半の南東欧を描くと、オスマン勢と戦い続けた武将には、たしかにキリスト教陣営の英雄というイメージがふさわしいように見える。じっさいオスマン帝国の進出は西欧世界を震撼させており、たとえばこれに抗したハンガリーのフニャディ・ヤーノシュ（1409-1456）も、スカンデルベグとともにキリスト教世界の守護者としてその武勲を讃えられている。そして事実スカンデルベグとフニャディは、対オスマン戦の盟友であった。またスカンデルベグが本拠地としたクルヤには、ムラト2世、またメフメト2世が自ら陣頭指揮をとって攻め寄せ、どちらもスカンデルベグに撃退されて撤退を余儀なくされたと伝えられる。とはいえスカンデルベグからすれば、事情はさほど単純ではなかったに違いない。というのも、この頃アドリア海沿岸部への覇権を狙っていた勢力には、東のオスマン帝国ばかりでなく、西のヴェネツィア共和国、また地中海東部への勢力拡大に余念がなかったアラゴン王アルフォンソ5世もいたからである。

ほとんど史実と化した伝説によれば、スカンデルベグは少年の頃、オスマン帝国の人質となってエディルネ（アドリアノーブル）にある皇帝の宮廷で育てられ、無双の戦士に成長したという。イスラームに改宗してキリスト教徒と戦い、スカンデルベグ（“アレクサンダー”-ベイ）という異名をとった彼が反オスマンに転向したのは1443年のこと。転向の理由はいくつか挙げられている。父の死後、カストリオティ家の領地をめぐるオスマン側と対立したこと、兄弟をオスマン皇帝に毒殺されたこと、そしてなにより、いかに皇帝の寵愛を受けようと彼の心はつねにキリスト教徒であったこと、などなど。時を同じくして起きた父の死とフニャディの対オスマン戦勝利によって、スルタンに背くことを決意した彼は、再度キリスト教に改宗し、その後は西方教会の忠臣として死ぬまでオスマン勢と戦い、アルバニアの地を死守した……。

このなかなかドラマチックなスカンデルベグ伝説の中で、史実として確認できるのは、彼が1443年より前にはたしかにオスマン軍の戦士としてキリスト教徒を相手に戦っていたこと、また1443年以後は反オスマンに転じたこと、くらいである。ノリの記述によれば、じっさいのスカンデルベグは20歳を過ぎてなお父とともにアルバニアにおり、オスマン帝の命令で戦闘に動員されたのは事実だとしても、それはいわば契約上のもので、カストリオティ親子は情勢に応じてヴェネツィアやドゥブロヴニクとも手を結び、わが身とテリトリーの安全確保を怠っていなかったらしい。毒殺されたことになっているすぐ上の兄が1445年までは存命であったことを示唆する資料もあるという。³

ということで、ほんとうのところスカンデルベグがなぜ反オスマンに回ったのかについて、仔細は明らかでない。ただ確かなのは、起きている時間のほとんどを戦争に費やした

のではないかと思われるその生涯で、彼が戦った相手はオスマン軍ばかりではなかったということだろう。アドリア海東側の権益を守るためにスカンデルベグを出し抜いてトルコと手を結んだヴェネツィア共和国とは10年以上戦争状態にあり、またアルフォンソ5世との約束を守るため、ナポリまで軍を率いて出かけて行き、フランスのアンジュー家と戦ったりもした。しかもその際には、時限付きとはいえオスマン側と和平も結んでいるのである。ちなみにこのときスカンデルベグに率いられてイタリアに渡り、現地に残ったアルバニア人たちが、南イタリアのアルバニア系住民 (Arbëreshë) の第一世代となった。

スカンデルベグはじっさい幾度となくオスマン軍の攻撃を退け、その活躍が西欧世界に驚嘆と賛辞をもたらした。けれども少ない歴史資料をつなぎ合わせてみると、現実のジョルジ・カストリオティは、キリスト教世界の守護者というよりは、文字どおり戦乱と策謀の時代であって、目前の敵と戦う以外に選択肢のなかった孤高の戦士といったほうがふさわしいように思われる

スカンデルベグは、この時代にしては高齢の63歳で病死し、その死後まもなくアルバニア全土はオスマン軍の旗下に陥ちる。英雄亡き後のアルバニアに侵入したオスマン軍の兵士たちは、スカンデルベグの墓を暴き、その骨をお守りにして不死身の戦士にあやかろうと遺骨の奪い合いをした—こんな死後のエピソードまで加えて、伝説は数かぎりない。そして、現実の彼の戦いが歴史上の多くの戦争と同じように忘却の彼方へと消え果てても、その武勇を伝える物語は時空を超え、広くヨーロッパへと伝わっていったのだった。

2. バルレティとスカンデルベグ物語

アルバニアのアレクサンドロスの生涯を綴った最初の著述は、彼の死後ほどない1480年にヴェネツィアで出版された作者不詳の『スカンデルベグ物語』とされる。⁴けれどもスカンデルベグの英雄像を西欧に伝え、ヨーロッパにスカンデルベグ文学を生み出すもとになったのは、アルバニア生まれのマリン・バルレティ (Marin Barleti 1450[60]-1512[13]) とその大著『スカンデルベグの伝記』だった。⁵

バルレティは、みずから「シュコドラのバルレティウス」と称しており、現在アルバニアとモンテネグロの境界上にあるシュコドラ (スラヴ語式にはスカダル) 湖をのぞむ町シュコドラの出身だったらしいが、その出自はイタリア系、アルバニア系、スラヴ系と諸説あり、はっきりしない。いずれにしても、当時ヴェネツィア領だったシュコドラでカトリック教徒として育ち、スカンデルベグ亡き後の1479年、ヴェネツィアがシュコドラから撤退するとイタリアに渡り、やがて修道士となって歴史的著述に従事したとみられる。

バルレティの歴史家としての最初の著作は『シュコドラ包囲』で、⁶ここには1477-78年に自ら参戦したシュコドラ防衛の様子—いかにアルバニア人たちが、シュコドラの町とスカンデルベグ亡き後のアルバニアを守るため勇敢に戦ったか—が記されている。もちろん西欧の歴史家たちはこの記述を事実とは考えておらず、じっさいここに登場し雄弁に語る人々の言動がどこまで実際にあったかは限りなく疑わしい。近年刊行された英訳の解説

には、アルバニア出身の作家イスマイル・カダレの『包囲』(Kështjella [The Siege] 1970)が『シュコドラ包囲』に着想を得たと記されているが、たしかにこれは歴史記述というよりは、叙事詩的想像力を喚起する軍記物語としての価値のほうが高いように読める。⁷

バルレティの名を後世に残すことになる次作『スカンデルベグの伝記』もまた、歴史記述ではなく軍記、あるいは英雄物語である。先に紹介したスカンデルベグにまつわる諸伝説—オスマン皇帝の人質からベイとなり、その後反オスマンの旗手へと転じる英雄の生涯のほとんどはここで語られている。これらの題材をバルレティがどこから仕入れたのかは不明だが、スカンデルベグを身ごもっている時の母の夢(“ドラゴンを生み、そのドラゴンの頭はオスマンの都にまで達するだろう”というお告げを受ける)や、肩に剣の形をした痣をもって生まれたという話も加えると、異郷での成長、卓越した力量と難題の克服(“大男のペルシャ人との死闘”など)、親族の死(兄弟の毒殺と父の死)、戦い、そして故郷への帰還といった前半のエピソードの数々は、古代や中世ヨーロッパに知られる英雄譚の構成要素そのものであるともいえる。反オスマンに転じてからのスカンデルベグの記述は多少なりとも史実に近いようだが、ムラト2世が臨終にさいして「スカンデルベグさえいなければ、余はバルカン全土を手に入れたであろうに」と痛恨の言葉を残すあたりなどは、どう大目に見てもフィクションである。

こんなふうに史実とはかなり異なる様相を呈してはいるものの、スカンデルベグの生涯を語ったバルレティの著作は、オスマン軍に対する恐れとトルコへの関心から、16-17世紀のヨーロッパで人気を博した。アシュコムによれば、ラテン語で書かれた原著はまずドイツ語訳となり1533年に出版された。⁸ドイツ語ではさらに別訳が1604年にも刊行されている。⁹イタリア語訳は1554年、ついでポルトガル語訳が1567年、¹⁰フランスでは1576年にジャック・ラヴァルダンによって、ロンサールのソネットを付した訳が作られた。そしてこれは1596年、ジェントルマンによって英語に訳された。¹¹

オスマン帝国がじっさいにヨーロッパの敵として脅威であった頃には、スカンデルベグはまだ近い過去の英雄として西欧の人々にはリアルに感じられていたのかもしれない。スカンデルベグの時代から200年が過ぎた1683年のウィーン包囲(いわゆる第二次ウィーン包囲)は、オスマン帝国最後のヨーロッパ進撃となったが、ここでオスマン軍を撃退したポーランドのヤン・ソビエスキに対しては、『蘇るスカンデルベグ 輝かしき勝者ポーランド王ヤン3世の生涯と人物についての歴史小編』と題された作者不詳の物語が出版された。¹²もちろん、かつての勇者スカンデルベグの事績になぞらえたものである。

18世紀以後、オスマン帝国の直接の脅威が西欧から遠のくと同期して、歴史物語としてのスカンデルベグ伝説は忘れられていき、やがてヨーロッパの人々の目にふれることはなくなる。けれども伝説の人物はそのまま歴史の闇に葬られることなく、ラヴァルダンのフランス語訳に文学的香りを添えたロンサールに始まり19世紀に至るまで、西欧の作家たちにインスピレーションを与え、各地で詩や戯曲のモチーフとなって生き続けた。¹³ヴェネツィアの作曲家アントニオ・ヴィヴァルディもオペラ『スカンデルベグ』を作曲してい

る。ただし1718年にフィレンツェで初演されたオペラの譜面はほとんど失われ、今は一部のアリアなど断片でしか知ることができない。

やがて時が経ち、近代人の趣向が変わってスカンデルベグは文学的想像の中でも栄光を失っていく。その最後の輝きがきらめいたのは、西欧の関心が「見知らぬヨーロッパ」としてのバルカン地域に向けられた19世紀だった。イギリスでは、冒頭にあげたバイロンの『チャイルド・ハロルドの遍歴』の一節がその代表格といえるだろう。英国ヴィクトリア朝時代の政治家ベンジャミン・ディズレーリ(1804-1881)は小説を書いたことでも知られているが、彼も1833年に『イスカンデルの蜂起』(The Rise of Iskander)という作品を発表している。イスカンデルはもちろんスカンデルベグのこと、オスマン帝国の人質となっていた「ギリシャのイスカンデル公」を主人公に設定した作品は、その文学的価値はともかく、イギリスまた米国で広く読まれ、版を重ねてロンドン、ニューヨークでともに1927年まで再版されたのだった。¹⁴ いっぽうアメリカでは、19世紀の高名な詩人ワズワース・ロングフェローが『路傍の宿屋の物語』(Tales of a Wayside Inn)第3部で「セファルディムの第2の話」としてスカンデルベグをテーマに取り上げている。「...やがて砦の城壁から、三日月の旗が降り / 群衆の見守る中、空の予兆のごとくに / 双頭の黒鷲を配した、イスカンデルの御旗が上る / 歓喜の叫びは、トルコに辟易した人々のもの / トルコ人の悪業で、アクヒサルは災厄の町と化したのだ / そして広く遠く聞こえる喜びのどよめきは / こう響きわたる、イスカンデル万歳と」¹⁵ —ロングフェローの詩に採用されたのは、オスマンのパシャに占拠されていたクルヤをスカンデルベグが策略を用いて奪還する場面である。ノリはこの詩の典拠をアルバニアの民謡かフランコの伝記と考えたようだが、確かなところはわからない。いずれにしても19世紀のこうした作品にも、バルレティの影が見え隠れしているように見える。

3. ビェルスキの『全世界史』とスカンデルベグ物語

西欧で16世紀に人気を博したスカンデルベグ物語は、やはり16世紀のうちにロシアにも伝わった。経路となったのはポーランドのマルチン・ビェルスキ(Marcin Bielski 1495?-1575)による『全世界史』だった。¹⁶ 正確には、ここに含まれた長い一章「アルバニアの君主、スカンデルベグについて(“O Skanderbegu macedonie albańskim książęciu”)」である。¹⁷ ビェルスキは、ポーランドの中央に位置するウッチ県に生まれたと伝えられる。とくに系統だった教育を受けた痕跡はなく、マゾフシェ公国のヤヌシュ3世、またジグスムント1世の宮廷などに仕える合い間に独学で諸学問の知識を得たらしい。

『全世界史』は1551年、ジグムント2世アウグストに捧げられてクラクフで出版され、その後第2版1554年、そして改訂3版が1564年と、それぞれ前の版に加筆改編されたものが出版されている。いずれも、記述の順序は異なるが「コスモグラフィ」(天地学)、聖書にもとづく世界史、ヨーロッパ諸国の列王伝、トルコの歴史や風俗、さらにはコロンブスのアメリカ大陸発見などが記述されており、天地創造とアダムの時から当時の最新情勢

に至るまで、全世界の出来事を網羅した著作であった。64年版にはモスクワ公国についての記述も加えられている。

ビェルスキのこの著作はロシアの『歴代記』(Хронограф) 形成にも重要な役割を果たした。ロシアでは伝統的に『年代記』(Летопись) とよばれるロシア固有の編年体による歴史書が作られていたが、15世紀後半からの世界観や宗教観の変化とともに、ビザンツやブルガリア、セルビアなど東方教会圏の歴史を含めた王朝別の歴史書『歴代記』が作られるようになった。その流れで16世紀半ばに作られた『歴代記』西ロシア・リセンションには、ビェルスキの『全世界史』のうち、シャルルマーニュの時代から1550年までの西欧の帝王や教皇についての記述、ハンガリーやチェコの歴史などが取り入れられている。¹⁸

そしてこの『全世界史』に組み込まれたのが「スカンデルベグの伝記」だったわけだが、じっさいのところポーランドでは、ビェルスキより前すでにバルレティの『スカンデルベグ』のポーランド語訳が出ている。¹⁹ いっぽうビェルスキのスカンデルベグ物語は、バルレティを編纂したもので、バルレティと一致しない箇所がある。この編纂をビェルスキ自身が行ったのか、あるいはすでに編纂されたテキストをビェルスキが利用したのかは不明である。

『全世界史』のロシア語訳は、第3版の64年版から作られた。訳を作ったのはロシア宮廷に仕えていたリトアニアの貴族A. ベレジェフスキーで、1584年のことと記録されている。この翻訳(の写本)の寄せ書きには「ジグムント・アウグスト王が「ロシア人の教養のため」に訳させた」とあるが、1584年の時点でアウグスト王はこの世にいない。この矛盾についてロシアのA. ソボレフスキーは、まず最初ポーランド語からベラルーシ語に訳され、その後そこから1584年にロシア語訳が作られたのだろうと推測している。²⁰ 何にせよ、アルバニアの英雄はこうしてビェルスキの全世界史記述の窓からロシアに伝わったのだ。なおロシアで1617年に作られた『ロシア歴代記』第2リセンションにも「アルバニア国とその王たち」「О албанской странѣ и о княжествѣ ихъ」という短い章がある。これはおそらくビェルスキのダイジェスト版と考えられるが、その出現の由来ははっきりしない。²¹ ビェルスキの『スカンデルベグの伝記』のロシア語訳は写本9本を残すが、アルバニアというロシアにとって遠い地のできごとであったためか、広く知られることにはならなかったように見受けられる。ロシア語訳については、ソ連時代に刊行された文学記念碑シリーズで読むことができる。²²

4. 南スラヴ世界のスカンデルベグ

南スラヴ世界にもスカンデルベグ物語は知られている。キリル文字で書かれた物語の表題は『スカンデルベグーツルノエヴィチ、洗礼名ジョルジの物語 «Повѣс(т) о Скендербегоу Ч(е)рноєвікоу а въ с(т)е(м) кр(е)щеніи наречено(м) Гиоргу»』。17世紀以後で3本の写本が残されており、²³ そのうちもっとも古い17世紀の写本(ペテルブルク・ロシア国立図書館, Q. IV, 341)はセルビア語で書かれているが、ロシア正書法の影響も見られ

る（下の例を参照）。「ツルノエヴィチ」の名が出てくるのは、スカンデルベグことジョルジ・カストリオティを、同じく 15 世紀に生き彼と姻戚関係にもあったというモンテネグロの君主ジョルジ・ツルノエヴィチ（1457-1528）と混同したか、後者の名を意図的に加えたものと推測される。²⁴ 文書が発見されたのがモンテネグロの都ツェティニエであることを考えると、ここに至った時点、あるいはその後、この名が加えられたのかもしれない。では南スラヴ語版（以下 SS）とビェルスキ、そのロシア語訳（R）、そしてまたスカンデルベグ伝説の源泉であるバルレティの原作はどのような関係にあるのだろうか。

まず 3 つのスラヴ語版がどれもバルレティの逐語訳ではないことは、さまざまな箇所に見られる書き換えや改変から確認できる。たとえばスカンデルベグの父ジョン・カストリオティは、バルレティでは「9 人の子供がいた」とあるが、スラヴ語世界の物語ではいずれも「3 人の息子と 3 人の娘を」もっていたと語っている：

[Bielski] W tym księstwie Albańskim albo Epirockim było na ten czas krześciańskie

Książę Jan Kastrjotus . . . miał trzech synow y corek takież (*Kronika*, 1564, 242r)

[R] В то время в княжестве Олбанском в Епире был государем князь Иоан Кастриот от роду князей Македонских . . . были у него три сына и три дщери. (Розов, С.9)

[SS] в гѣствѣ і книжствѣ албанским іли реци еписким. был в тыа днїи хрстіанскїи кнѣзь іванъ кастриѡ . . . мѣл ҃сны і ҃дщери (Лавров, С.63)

アルバニアまたの名をエピウスという王国にキリスト教徒の王ジョン・カストリオティがおり . . . 3 人の息子と 3 人の娘がいた。

このように、子供の数についての描写で 3 者は一致し、バルレティと異なっている。ロシア版がビェルスキ由来であること、またすでに言及したとおり、ビェルスキがバルレティの逐語訳でないことは明らかであることから、SS がビェルスキかあるいはロシア版から作られたか、または SS（のプロトグラフ）からビェルスキが生まれたのか、のいずれかとなる。では次に、以下の箇所を比較してみよう。物語の冒頭部分の一節で、オスマン軍との戦いに敗れたジョン・カストリオティがオスマンと和を結び、3 人の息子を人質として差し出すことになったというくだりである。「約束では、息子たちをイスラームに改宗させないはずだったのに、スルタンはそれをすぐ反故にして彼らを改宗させた」と、それぞれのテキストは以下のように語っている—

[Bielski] . . . musiał uczynić ugodę z Amuratem, tym obyczajem, aby mu dawał dań, a w zakładzie trzy syny swoje dał, którym były ty imiona: Stanisi, Goer, Konstanty. Napłakawczy się ich ociec Jan Kastriot i nacałowawszy posłał je do Adrynopola, tym obyczajem, jako umowa była, aby ich nie turczono. Ale to zmienił okrutnik, skoro mu je przywieziono, dał je obrzazać na turecką wiarę, . . . (*Kronika*, 242r)

[R] князь Иоан Кастриот олбанский обнищал до конца и для того

умыслил дань давать Амурату, царю турецкому. И дал ему в закладе три сыны своя —

Станислава, Юрья и Константина. А договор был таков меж ими, что было их Амурату

не отводить от веры христианской и не обрезать их во свою веру. А как их привели во Андрианополь ко Амурату, и Амурат, не помнячи слова своего, того ж часа велел их обрезать и новья имена им велел дать. (Розов, С.9-10)

[SS] . . . учинил с ними миръ дань им давати. и да(л) амурату .г. снѣу у закла(д)у наплакавши(с) вѣць их и нацѣловавши(с) посла(л) и(х) къ цѣру муратоу до дрѣнопола, ты(м) обычае(м), како бы(л) уговори(л). да не потоурчать снѣвѣ его. но с(л)ѣга(л) цѣръ мура(т) ка(к) вни умѣют лга(т). (Лавров, С.64)

ここでビェルスキとロシア訳、SS はどれも互いに異同を含むが、ビェルスキと SS が、スカンデルベグの父の様子を「涙にくれつついくども接吻して」3 人の息子をオスマン側に送った、と同じように表現しているのに対し、ロシア語版にこの語句は欠けている。このような例から、SS がロシア経由で成立した可能性は排除できるだろう。つまりはバルレティが編纂されてビェルスキ、そしてそこから SS (のプロトグラフ) が作られたか、あるいは SS のプロトグラフがビェルスキのソースになったか、のどちらかということになる。そしてこれについて、スカンデルベグ物語のスラヴ語写本を研究したローゾフは、ビェルスキがスカンデルベグ物語を執筆するにあたり、すでにあつた南スラヴ語版のスカンデルベグ物語を参照したのだろうと述べている。けれどもこれは支持しがたい。

たしかにビェルスキと南スラヴ版 (以下 SS) は 上記のケースが示すように、ほぼ共通しており、同じソースに由来していることは確実といえる。だが同時に双方には異なりもあり、ある場合には SS にビェルスキにはない表現があり、別の場合にはその逆である。したがってこの限りでは SS がビェルスキのソースなのか、あるいは逆なのかは判断がつかない。だがいくつかの言語特徴は、少なくとも現存する SS がビェルスキに依拠したことを示している。たとえば先に示した冒頭の箇所、ビェルスキも SS も *posłał je do Adrynopola*, *посла(л) и(х) къ цароу муратоу до дрѣнопола* 「彼らをアドリアノーブルに送った」と、空間的意味で前置詞 *do* を用いている。次の箇所にはこの *do* の用法がより明確に現れる—

[SS] *цѣръ мурт тогда . . . послал поклицара до краля угрсаго владислава просеци мира,[. . .] люди селски пришли до скендербѣга молащи его* (Лавров, С.69).

[Bielski] *Amurat. . . posłał do krola Węgierskiego prosząc o przymierze [. . .] lud pospolity przyszli do Skanderbega prosząc* (*Kronika*, 243r, 244v)

ムラトはハンガリー王ヴラディスラフに和平のための使者を送り [. . .] 民衆はスカンデルベグのもとに集まって請うた . . .

古ポーランド語には、現代語でそうであるように、*do* を「～へ」の意味で使用する用法があつたことが確認されているが、セルビア語の *до* には「～まで」の意味が生きており、上記のような状況で積極的に使用したとは考えにくい。²⁵つまりこれらにある *do* の使い方はポーランド語法によるものと判断され、するとこのウリ二つの文は、ビェルスキから

SS が作られたという関係でとらえられることになる。

また次の前置詞 nad の用法も、SS がポーランド語から訳されたことを示すものだろう—

[SS] . . . увидевши други Персии . . . ратовал јего над слово како бил уговорил
между собою [Lavrov, C. 65]

[Bielksi] . . . przypadszy drugi towarzysz Persa . . . ratował go nad umowę (Kronika 242v)

ここは「もう一人のペルシア人がそれを見て…約束に反して彼に戦いを挑み」という箇所
で、nad+ 対格は「～に反して」と読める。²⁶ Nad のこのような用法は古いポーランド語に
は例がある²⁷ が、古セルビア語のエヴィデンスは確認できない。²⁹

このように、SS がビェルスキに依拠したと考える根拠はあるが逆は根拠に乏しく、ロー
ゾフの主張するところとは反対に、現存する SS はビェルスキから発したと判断される。
そもそもビェルスキが古い南スラヴ語（おそらくセルビア語）写本を持っていてそれを
ポーランド語に訳したということ自体がどうていありそうにないと思われるのだが。

さてここから当然、SS とビェルスキで異なる箇所は、SS がもとのポーランド語テクス
トを改変したものと判断される。そしてじっさい SS に見られる表現は、この推測を裏付
けている。たとえば SS もビェルスキも、オスマントルコを悪としていることに変わり
はないが、教皇庁やヴェネツァ共和国の動静に関しては、ビェルスキも、またおそらくそ
のもとにあったバルレティも、西方教会側の人間であったためか否定的な記述はしてい
ない。これに対し SS には、西方勢力がスカンデルベグを窮地に陥れたと非難する箇所が
ある。スカンデルベグが、ポーランド＝ハンガリー王ヴワディスワフの要請でヴァルナの戦
いに馳せ参じようとした場面では—

Али како су wдавно латыни сребролюбци и тут показали. взали ѿ туракъ дар і не стали
на своем словѣ как су были уговорили. (Лавров, C.75)

「しかし以前から拝金主義者であったカトリック教徒たちは、ここでもそれを露呈し、
トルコ人から贈物をもって先に合意したことを守ろうとしなかった」

と、西欧カトリック教会勢を日和見主義のあてにならない同盟者として描いているので
ある。これに対応する箇所は、ビェルスキには存在しない。

このように、アルバニアで生まれたヒーローはイタリアで物語に形成され、ヨーロッパ
を時計回りに一周して、主人公の生まれ故郷の隣国に、やや語り口を変えて戻ってきたの
だった。このセルビア（あるいはモンテネグロ）版がいったいどこで誰によって作成され
たかは謎だが、SS の古写本は、モンテネグロの君主ペタル I 世（1748-1830）とペタル II
世（1813-1851）の時代の文書の中に発見されたとされる。²⁹ ツェティニェに都のあった
モンテネグロが古くピョートル大帝の時代からロシアと親交をもっていたことを考える
と、ビェルスキの 64 年版がどうかしてロシア経由で南スラヴにもたらされたか、ある
いはロシアに行ったモンテネグロの誰かがビェルスキを知って訳を作り持ち帰ったのか、
などといったことがあれこれ想像されるのである。

5. おわりに

アルバニアで国民的ヒーローとなったのとは反対に、口承文芸の豊富なバルカンのスラヴ語圏で、スカンデルベグについての民間伝承や口承文芸はあまり知られていない。もしかしたらそれは、ヴァルナの戦いで若きハンガリー王ヴワディスワフのもとに馳せ参じようとしたスカンデルベグの行く手を阻んだのが、ほかならぬセルビアのデスポト、オスマン皇帝と姻戚関係にあったブランコヴィッチだったからだろうか、あるいは言語的違いなど、なんらかの文化的障壁があったためだろうか。

たしかに 16 世紀ダルマチアの作家 I. ゲンドウリッチ (1589-1638) や J. パルモティチ (1606-1657) は作品の中でスカンデルベグの名と事績にわずかにふれている。けれどこれらが口承文芸から採用されたものだという証拠はない。南スラヴ圏ダルマチアでスカンデルベグを語った作品としてもっともよく知られているのはアンドリヤ・カチッチ＝ミオシッチ (1704-1760) の『スラヴ民衆の興ある話』に含まれたものだろう。³⁰ 韻文と散文を組み合わせて書かれたこの作品は、クロアチア文学史で、口承文芸を加工して文字化し、都市民の娯楽教養文学とした「大衆文学 (pučka književnost=folk literature)」の代表作となっている。けれどもこの中のスカンデルベグについての歌も、内容や構成からして、起源はやはりバルレティにあるように見える。バルレティの物語が口伝でダルマチアに伝わりそれを作家が採用したのかあるいは直接書物で知りこれを十音節で一連となる民謡調の詩に改作したのか、そのあたりは不明ではあるのだが。

いずれにしてもミオシッチの創作は 19 世紀になって、セルビアのポポヴィチによる『栄光あるエピルスの王ジョルジ・カストリオティ・スカンデルベグの生涯と武勲』³¹ などに題材を提供することになる。かつて対トルコ・モードのヨーロッパでキリスト教徒の雄として讃えられたスカンデルベグは、19 世紀バルカン・スラヴ人の民族興隆モードの中、民族独立の雄と再解釈されて蘇ったのだった。

スカンデルベグの実像は半ば歴史の霧のかなたに隠れて見えないが、バルレティによって作り出された物語は、あたかも主題がさまざまな変奏曲を作り出すように、その後のヨーロッパそしてスラヴ地域で、それぞれの時代や受け手の需要にあわせて姿を変えて生き続けた。そして伝承はいつか史実であったかのように、歴史書にさえも書かれるようになったのである。

注

1. 土井晩翠訳『チャイルド・ハロルドの巡礼』英米名著叢書, 新月社, 1949 (昭和24年), 第2巻 (<http://books.salterrae.net/osawa/html/childeharold.html>[2019年4月20日アクセス])。
2. 本稿第1節の記述は主に以下に依拠する: Fan Stylian Noli, *George Castrioti Scanderbeg (1405-1468)* (New York: International University Press, 1947), ff.105; なおジョルジ・カストリオティはアルバニア語で Gjergj Kastrioti, 『アルバニア歴史辞書』では英語表記を George Castriotta としている: Robert Elsie (ed.) *Historical Dictionary of Albania*. 2nd edition (Lanham: The Scarecrow Press, 2010), p.398. 本稿では「カストリオティ」とする。また「スカンデルベグ」の欧文表記には Scaderbeg と Skanderbeg の両方が使われるが, 本稿の英語表記は Elsie 上掲書にならい Scanderbeg とする。
3. Noli, *George Castrioti Scanderbeg*, p.88, p.103.
4. *Scanderbegi Historia. Explicit Historia Scanderbegi edita per quendam Albanensem*. このほかスカンデルベグのイタリア遠征に随伴した Demetrio Franco によるスカンデルベグの記述など断片的なものはいくつかある。フランコの著作は多少改変されてイタリア語に訳された: Noli, *George Castrioti Scanderbeg*, p.13.
5. *De Vita Moribus Ac Rebus Praecipue Aduersus Turcas, Gestis, Georgii Castrioti, Clarissimi Epirotarum Principis, qui propter celeberrima facinora, Scanderbegus, hoc est, Alexander Magnus, cognominatus fuit, libri Tredecim, per Marinum Barletium Scodrensem conscripti* (イピロスの名君, その武勲によりスカンデルベグすなわち偉大なるアレクサンダーと称された, ジョルジュ・カストリオティの生涯と人物, およびとくにトルコ人に対する事績についての, マリヌス・バルレティウスによる 13 章の歴史書), ヴェネツィアでの初版は 1508-10 年。
6. *De obsidione Scodrensi* (Venice: Bernardino de Vitabilus, 1504).
7. David Hosaflook (ed.) *The Siege of Shkodra* (Tirana: Onufri, 2012).
8. *Des aller streytparsten fürsten Georgen Castrioten genaît Scanderbeg. . . In Latein beschreiben uñ yetz durch Joannẽ Pinicianũ neulich verteutsch* (Augsburg: Heinrichen Steiner, 1533); See, Benjamin B. Ashcom, “Notes on the Development of the Scanderbeg Theme,” *Comparative Literature*, Vol. 5. No.1, 1953, p.19.
9. T. F. Unger によるものでマゲデブルクで刊行された: Ashcom, “Notes on the Development,” p.19.
10. *Historia del magnanimo et valeroso Signor Giorgio Castrioto detto Scanderbego . . . per Pietro Rocca novamente tradotta* (Venice, 1554); *Chronica do valeroso Principe e inuenciuel Caipitão Iorge Castrioto senhor dos Epienses. . . transladada em Portugues por Francisco Dandrade* (Lisbon: Marco Borges, 1567); See, Ashcom, “Notes on the Development,” p.20.
11. *The Historie of George Castriot, Surnamed Scanderbeg, King of Albanie; containing his Famous Actes, his Noble Deedes of Armes and Memorable Victories against the Turkes for the Faith of Christ, newly translated out of French into English by Z.I. Gentleman* (London, 1596).
12. *Scanderbeg redivivus. A historical account of the life and actions of the most victorious Prince John III (Sobiesky), king of Poland* (London, 1684); Robert Elsie, “Benjamin Disraeli and Scanderbeg. The novel ‘The Rise of Iskander’ (1833) as a contribution to Britain’s literary discovery of Albania,” *Südost-Forschungen*, 1993, 53, pp.25-52; p.38.
13. Ashcom, “Notes on the Development,” pp.21-29.
14. Elsie, “Benjamin Disraeli and Scanderbeg,” pp.32-35.
15. Henry Wadsworth Longfellow, *Tales of a Wayside Inn*, Visitor’s edition, Part third. “The Spanish Jew’s Second Tale: Scanderbeg” (Boston: Houghton Mifflin, 1913), p.244.
16. *Kronika wszystkiego świata. . .* (Kraków, 1551). 正式なタイトルはかなり長いので省略する。
17. この章だけ単独で 1961 年にポーランドで刊行されている: *O Skanderbegu macedonie albańskim księżęciu* (Warszawa, 1961).
18. Полное собрание русских летописей. 1914. Т22. Ч.2. С.207-266.

19. Cyprian Bazylik, *Historia o Żywocie y Zacznych sprawach Jerzego Kastriota, którego pospolicie Scanderbegem zowq. Książęcia Epireńskiego na Trzynaście Książ rozdzielona napisana od Maryna Barlecyusa*. Przydane są ktemu o oblężeniu y dobywaniu Szkodry Księgi Troje (Breść, 1567).
20. *Соболевский А.И.* Переводная литература московской Руси. СПб. 1903. С.54.
21. *Попов А.* Изборник славянских и русских сочинений и статей, внесенных в хронографы русской редакции. Приложение к Обзору хронографов русской редакции. М. 1869. С.156-159.
22. «Повесть о Скандербеге». Изд. подгот. Н. Н. Розов, Н. А. Чистякова. М.-Л. 1957.
23. *Розов, С.* 93–147; *Лавров П.А.* Разбор труда П.А.Ровинского «Черногория в ее прошлом и настоящем» // Сборник Отделения русского языка и словесности Императорской Академии Наук. 1906.
24. *Ровинский П. А.* Черногория в её прошлом и настоящем. География. История. Этнография. Археология. Современное положение. СПб. Т.I. 1888. С. 409–415.
25. Franz Miklosich, *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen*, Bd.4 (Wien: Wilhelm Braumüller, 1868-1874), pp.520–522; Белић, А. *Историја српског језика. Фонетика. Речи са деклинацијом. Реч са конјугацијом*. Избрана дела Александра Белића, 4 (Београд: Завод за уџбенике и наставина средства, 1999), С.301.
26. ロシア語訳では Другий персии видячи то и забывши слово что было никому не помогать . . . 「もう一人のペルシャ人はこれを見て、誰も助けてはならないとした約束を忘れて . . .」Повесть о Скандербеге. С.11.
27. Stanisław Urbańczyk (red.) *Słownik staropolski*, T.5 (Wrocław: Polska Akademia Nauk, 1965), p.27; Miklosich, *Vergleichende Grammatikn*, Bd.4, p.424.
28. たとえばミクロシチの『古スラヴ - ギリシャ - ラテン語辞書』の надь の項目には空間的意味の「上に」しか掲載されていない : Franz Miklosich, *Lexicon Palaeoslovenico-Graeco-Latinum* (Wien, 1865), p.401.
29. *Лавров П.А.* Разбор труда, С.60.
30. Andrija Kačić Miošić, *Razgovor ugodni naroda slovinskoga* (Venice, 1756).
31. Поповић, Ј. *Живот и витешка војевања славног кнеза епискога Ђорђа Кастриота Скандербега*. Будим, 1828.

Scanderbeg Story. Legend and Variations

Keiko MITANI

Scanderbeg, born George Castrioti, was a warrior in fifteenth century Albania. As a historical figure, Scanderbeg is obscure except for the fact that, in 1443, he mounted an insurrection against Murad II of the Ottoman Empire, and continued to actively resist the Ottomans until his death in 1468. However, his life and acts were molded by Marin Barleti into the epic story of a champion who, standing against the Ottoman Empire, protected Western Christianity. The biography of a legendary Scanderbeg was disseminated in Western Europe, first in translation, and later as epic poems, theatricals, and novels. By the mid-sixteenth century, Barleti's work had reached Marcin Bielski, a Polish historian, and the latter embedded the story of the life and deeds of Scanderbeg into his *Chronicle of the Whole World*, through which the Scanderbeg story was introduced to Russia and the South Slavic regions. This short paper depicts the way in which the legend of Scanderbeg was circulated throughout Europe, being transformed into different works in accordance with the social backgrounds and tastes of people belonging to particular times and places, up to and through the end of the nineteenth century.